

## 荒木恵作 「ドライな関係」

<前編>

古河先生 …というわけで、今日は4時間目に学年集会がありますから、イスを持って体育館へ行くようにね。それから委員長は、クラス全員そろったら…。

浜田ユリ子 (モノローグ)学年集会かぁ。またクラス同士のエゴのぶつかり合い。「ああでもない、効果音)でもない」とダラダラやり合って時間切れでまたクラスへ持ち帰り。こんな無駄なことの繰り返し。あーやだ。もうやだ。勝手にやってくれ!

ユリ子ナレーション わたし、浜田ユリ子。青春高校2年生。このごろ、かなりめいってる。家に帰ると、商社マンで外国にまで飛び回っている父と、ブティックで働いている母。そして物心ついたときからの英才教育で、勉強一筋の中2の弟、和哉。「家族団らん」なんて言葉、少なくとも我が家の辞書にはない。逃げるように学校に来て、みんなてんでに自分のことばかり。だれも心を開いて友達になんかなろうともしない。空気まで薄いような気がして、いるのが苦しくなる。乾いた家庭。乾いたクラス。そして乾いた心。ドライ。ドライ。みんな、ドライな関係…。

委員長 ではこれから、文化祭についてみんなの意見を聞きたいと思います。うちのクラスは模擬店がいいということなんですが、どうですか?

生徒A はい、絶対模擬店がいいと思います。模擬店以外だったら、展示とかになっちゃうわけでしょ?

委員長 そうということです。

生徒B 劇とかだっていいわけだろ?

生徒C だれがやるんだよ、だれが!

生徒D 展示だってイヤだ! あんな暗いのやってらんないよ。

生徒たち (口々に)「そうだよねえ」でも劇も楽しそうじゃん。」等々。

委員長 ほかに意見はありませんか?

菊池久美 (小声で)ユリ子、超つまんなくない? カッたりーよ。

ユリ子 (小声で)本当。なんか、面白いことないかなあ。

久美 (小声で)そう来ると思った! ねえ、今日さあ、飲みに行かない?

ユリ子 (小声で)えー! やばいんじゃないの?

久美 (小声で)いいじゃん。制服着ていくわけじゃないし、バレやしないよ。

ユリ子 (小声で)でもわたし、お酒って飲んだことないんだよな。

久美 (小声で)大丈夫だよ。飲むたって、カクテルとかサワーとか、軽いやつでいいんだから。

古河先生 そこ! 何をしゃべってるの? 文化祭は、クラス全体が一つになって行動するんだから、一緒になって考えなきゃダメでしょ?

久美                    はーい、すみませ〜ん！

ナレーション        誘惑の主は、菊池久美。男友達との派手な付き合いで、とかくうさの絶えない子なんだけど、今のわたしには気楽に話せるたった一人の友だ。

（音楽）                ディスコ音楽。以下の会話のBGM)

久美                    あーおいしい！ やっぱ疲れた時はこれよね？

ユリ子                  ちょっと久美、飲みすぎじゃないの？

久美                    大丈夫よ。ユリ子もどんどん飲んでよ。

ユリ子                  う、うん。

ナレーション        飲んでいるうちに、何だか頭がホワッとして、気が遠くなっていくのを感じた。でもすごくいい気持ち。なんかイヤなことがすべて忘れられそう。

ユリ子                  ようし、飲んじゃう。あのォ、お代わりー！

ナレーション        だがそのうちに何が何だか分からなくなったわたしは、ムカムカ気持ち悪くなって、お定まりの 小間物屋 開き。ズキズキする頭を抱えて、青い顔して家に着いた時は、12 時近かった。

ユリ子                  ただいま。

母                      お帰り。今日は遅かったのね。

ユリ子 (モノログ) “遅かった”？ それだけ？ 一人娘が初めてこんな時間に帰ったのに、死にそうなほど頭痛いの、それだけ？ 和哉だったら、30 分塾の帰りが遅れてもオロオロするぐせに。——いいわよ、それならわたしも勝手にやる！

ナレーション        こうして、わたしの“乱れた”生活は始まった。

久美                    ユリ子、今日も飲みに行くんだけど、一緒に行かない？

ユリ子                  うん、行く行く。

久美                    今日はね、大学生の先輩とビアホール。パーっと行こ。

（音楽）                (BGM)

（効果音）              (ユリ子、久美、男子の笑い声)

ナレーション        数日後、わたしは担任の古河先生に呼ばれた。

古河先生              浜田さん、最近どうしたの？ 昨日 2 組の担任の金子先生が、駅の近くのビアホールで、あなたを見たって言ってるんだけど、どうなの？

ユリ子                  はい。

古河先生              本当なのね。先生残念だな。まだ未成年なんだから、飲んではいけないのは分かってるよね？

ユリ子                  ……。

古河先生              浜田さん、何か問題抱えてるんじゃないの？ 校長先生には決まりだから報告するけど、でも先生、どんなことでも相談に乗るから、いつでもいらっしゃい。いいわね？

ナレーション        意外だった。古河先生がこんなにわたしのことを思っていてくれたなんて。全く

乾ききったわたしの心に、それは小さなぬくもりを与えてくれた。結局わたしは、3日間停学という処分を受けた。家にいたくなかったわたしは、この3日間ともひそかに久美と連絡を取り合っては、外出していた。その久美がまた新たな誘惑を仕掛けてきたのは、停学明けで登校して数日後のことだった。

効果音) 教室のガヤ)

久美 今日(今日は)帰りに渋谷で遊んでい(い)かない? 買(買)いたい物あるんだよね。

ユリ子 とか何とか言(言)って、ナンパ目当(目当)てでしょ。

久美 ピンポーン! 大正解。

ユリ子 ま、いっか。付き合(合)うよ。

ナレーション わたしはナンパなんて全然興味がな(な)かった。でも家に帰(帰)るのが少しでも遅(遅)くなるのがうれし(うれ)しかった。“あんな自分勝手(勝手)な親(親)のところへなんか、だれ(だれ)がま(ま)ともに帰(帰)れるか”という気(気)分(分)だった。

効果音) 街なかの雑踏)

深谷伸 ねえ君(君)たち、今(今)ヒマ? おれ(おれ)たちと一緒(一緒)にドライブし(し)ない?

山岡 こんなところふらつ(つ)いてた(た)って、疲(疲)れるだけだからさ(さ)ぁ。行(行)こうぜ。

ユリ子 久美、どうす(す)る?

久美 もち、行(行)くわ(わ)よ。だ(だ)ってあ(あ)の子(子)たち、顔立(顔立)ちもい(い)いいし、背(背)だ(だ)って高(高)くて、カッ(カッ)コいいじ(じ)ゃん。行(行)くでし(し)ょ?

ユリ子 う、うん。

伸 よし決(決)まりだ。乗(乗)れよ。横(横)浜(浜)のベイブリッ(ブリッ)ジ連(連)れてっ(っ)てや(や)っからよ。じゃ行(行)くぞ!

効果音) 車の発信音)

ユリ子 (モノローグ) こんなところ来(来)ちゃ(ちゃ)ってよ(よ)かったの(の)かな? でも来(来)ちゃ(ちゃ)ったんだ(だ)からし(し)ょうがな(な)いよ。だ(だ)けどどうなるん(ん)だろう。見(見)ず知(知)らずの男(男)の子(子)と、こ(こ)うや(や)って肩(肩)寄せ合(合)って(て)るわた(わた)しは、一(一)体(体)だ(だ)れ(れ)なん(ん)だろう。でもい(い)いい。こ(こ)うや(や)ってわた(わた)しに構(構)ってぐ(ぐ)れる人(人)が目(目)の前(前)にい(い)る。それ(それ)だけ(だけ)でい(い)いいよ。

ナレーション わたしはそうつ(つ)ぶやき(き)ながら、目(目)を輝(輝)かせてヨ(ヨ)ットの話(話)をし(し)てい(い)る深(深)谷(谷)君(君)とい(い)う若(若)者の顔(顔)をじ(じ)っと見(見)つめ(め)た。それ(それ)から数(数)日(日)後(後)――。

効果音) 電話の着信音)

弟和哉 はい、浜(浜)田(田)です。はい、はいち(ち)ょ(ょ)っとお待(待)ちぐ(ぐ)ださい。姉(姉)貴(貴)一、電(電)話(話)だ(だ)よ!

ユリ子 あ、ありが(が)とう。もし(もし)もお電(電)話(話)代(代)わり(り)まし(し)た。

伸 (フィルタ(タ)ー音) あ、おれ。覚(覚)えてる? 渋(渋)谷(谷)でナンパ(パ)した。

ユリ子 お、覚(覚)えてま(ま)すけ(け)ど、何(何)か?

伸 おれ、あ(あ)の時(時)、君(君)のこ(こ)と気(気)に入(入)っちゃ(ちゃ)って。だ(だ)からもう一(一)度(度)付(付)き合(合)ってぐ(ぐ)れないか(か)な。

ナレーション ビックリ(リ)した。でもあ(あ)の夜(夜)、家(家)のそば(そば)ま(ま)で送(送)ってき(き)てぐ(ぐ)れた彼(彼)のこ(こ)とを、わた(わた)しも一(一)度(度)限(限)りのドライ(ライ)な関(関)係(係)で終(終)わ(わ)らせてしま(ま)いた(た)くな(な)った。その時(時)からわた(わた)しは、

深谷君と毎日のように会うようになった。乾いた砂地のようなわたしの心に、彼の言葉、彼のしぐさ、彼のすべてが温かく吸い込まれていくようだった。

効果音) (マッチをする音。タバコを吸い、吐く音)

ユリ子 深谷君って…。

伸 あ、伸っていうんだ。伸でいいよ。

ユリ子 うん。伸ってタバコ吸うの？

伸 ああ。中1ん時から吸ってるよ。ユリは吸わないのか？

ユリ子 …吸ってみようかな。

ナレーション わたしは心からいろいろなものを教わった。タバコ、シンナー、お酒…。もうわたしの体はボロボロだった。でも、伸が喜ぶものは何でもやった。

ユリ子 (モノローグ) わたしには今、伸しかいない。親はわたしのことを見捨てるけど、伸は絶対そんなことをしない。いつでもわたしを第一にしてくれてる。

効果音) (教室の休み時間のガヤ)

久美 ねえ、最近どうなの？

ユリ子 え、何が？

久美 まーた、しらばっくちあって。彼のことに決まってんじゃない。

ユリ子 あー、深谷君？ 別に何ともないよ。ただお酒とか、ディスコとか行くぐらいかな。それより久美こそどうなのよ、山岡君。

久美 わたし？ えへへ、この前朝帰りした時に、親に言い訳するのが大変だったんだ。

ユリ子 えー！ じゃあ、行くところまで行っちゃったっていうやつ？

久美 うーん。まあそんなとこかな。

ユリ子 やったじゃん。

久美 そうでもないよ。なんかしつこくてさ。毎日電話してくるんだもん。

ユリ子 ふーん。そうなの。

久美 だから別れようと思ってんだ。しょせんナンパ男なんてこんなもんよ。

ナレーション 久美の言葉を聞いた時、はっきり言って怖かった。

ユリ子 (モノローグ) 伸もそうなのかな？ ううん、違う。伸はそんな人じゃない。わたしは彼を信じてる。

ナレーション わたしはそう思った。自分の心にそう言い聞かせた。どんなに酔っても、その勢いで唇を合わせても、決してそれ以上のことは求めなかった彼に、わたしはすっかり心を許していた。その夜のことだった。わたし両親が旅行で留守の伸の家に遊びに行った。

音楽) (BGM、ディスコ音楽)

伸 ユリ、おれ、お前のこと好きだよ。

ユリ子 何よ突然。照れるじゃない。

伸 お前もおれのこと好きだよな？

ユリ子 も、もちろんよ。どうしたの、改まって？

伸 それなら、お前の体もおれにくれよ。

ユリ子 え？

伸 おれへの愛のあかしにさ。ないいだろう？ 抱き寄せ、押し倒そうとする。）

ユリ子 伸、何すんの、止めて！

伸 今更何言ってんだよ。お前もこれを待ってたんだろ。ほら、言うとおりにしな  
て。

ユリ子 や、やめて！

効果音) 平手で打つ音)

伸 おいちょっと待てよ、ユリ！

ナレーション わたしははだしのまま、暗やみの中を走り出していた。ショックだった。あんなに  
伸を信じていたわたしがバカみたいに思えて、涙があとからあとから出てきた。  
――どれくらい走っただろう。疲れたわたしは近くにあったベンチに腰を下ろし  
た。ふと見ると、目の前に立てかけた看板が目に入った。

ユリ子 (モノローグ) 読み出す) 「ここに愛がある。日曜日にはぜひおいでください。泉バプテスト教  
会。」何だ、教会の案内か。“ここに愛がある”って、そんなもの、どこにあるって言  
うの？ 愛なんてカッコいいこと言うけど、だれがわたしのこと愛してくれたって言  
うのよ。親？ 兄弟？ それとも友達？ そんなのいやしない。彼だけは、伸だ  
けは本当にわたしのこと愛してくれたと思ってた、ついさっきまで。だけど、だけ  
ど、彼の欲しかったのは結局わたしの体だけだったじゃない。どうせわたしは誰  
からも愛されてないのよ。 泣く)

効果音) 電車の車内。次のナレーションのバックで)

ナレーション わたしは思い足を引きずりながら、終電に間に合うように駅に急いだ。心の中を、  
乾いた風が寒々と吹き抜けていた。駅を下りると、時計は1時を回っていた。さ  
すがに気がとがめたわたしは、家に電話をした。

ユリ子 もしもし、わたし。

母 (フィルター音) あ、ユリ子？ 今どこ？ 大変なのよ。和哉が、和哉が…。

ユリ子 ちょっと、和哉がどうしたのよ。ねえ、お母さん。

父 (フィルター音) あ、もしもし、ユリ子か？

ユリ子 お父さん？ ねえ、和哉がどうしたの？ 何があったの？

父 (フィルター音) 実は、部屋がきれいに片付いてて、手紙が置いてあったんだ。ど  
うも家出をしたらしい。

ユリ子 え!?

父 (フィルター音) お前のことも心配してたんだ。とにかく早く帰ってきなさい。

ユリ子 (モノローグ) 和哉が？ 親の期待を一身に背負って、黙々と勉強していたあの和哉が家出？

そんな!

ナレーション 不思議な気持ちだった。日ごろ顔を合わせても、話らしい話もしない弟。わたしのことなど何も気にかけてくれなかった両親。そんな乾ききった空気が、今、ピリッと破れて、何かに向けて流れ出したようだった。

ユリ子 (モノローグ) 和哉のバカ。死んじゃダメだよ!

ナレーション わたしは足の痛さも忘れて、家に駆け出していた――。

#### <後編>

母 (フィルター音) ユリ子、大変なのよ。

ユリ子 え、和哉が家出?

父 (フィルター音) そうなんだ。だから早く帰ってきなさい。

ナレーション わたしは浜田ユリ子。青春高校2年生。今、我が家でとんでもないことが起こってしまった。弟の和哉が家出をしたというのだ。あんなに黙々と勉強一筋に生きてきた和哉が、家出なんて信じられない。わたしは急いで家に帰った。

ユリ子 お父さん。

父 お、ユリ子。和哉はまだ見つかっていないんだよ。

ナレーション 父はとても心配していた。あんなに心配そうな父の目は久しぶりだ。

父 お父さんは、これから和哉を捜しに行ってくるからな。

ユリ子 わたしも行く。

ナレーション わたしは、近所の公園や川の土手など、どこにいるのか見当もつかない和哉を捜し続けた。その時だった――。

古河先生 浜田さん?

ナレーション 向こうのほうから、担任の古河先生が走ってくるのが見えた。

古河先生 (ハアハア息を整えながら) 浜田さん、和哉君を捜してるんでしょ?

ユリ子 そうなんです。でも見つからなくて。…先生、どうしてそれを?

古河先生 うん。和哉君は今、先生の友達の家にいるのよ。

ユリ子 え、先生の友達の家に?

古河先生 そう。この近く。水島さんという、わたしの教会のお友達なの。さ、行きましょ。

ナレーション わたしたちは、水島さんの家に向かいながら、道々話した。先生の話だと、和哉は、親に毎日言われるまま、ひたすら勉強していたが、それがたたってノイローゼ気味になっていたらしい。驚いたことに、和哉は最近、教会に行きだしたという。そこで、わたしの弟だと分かった古河先生や、お友達の水島さんに、いろいろ相談に乗ってもらっていたのだそうだ。

ユリ子 先生はじゃあクリスチャンなんですか?

古河先生 ええ、まだ駆け出しだけどね。水島さんに導かれて。

ユリ子 そうか。どうりで何か普通の人と違うって感じがした。



ナレーション わたしはその時、あのお酒を飲んで停学食らった時の、『何でも相談に乗るから』と言った先生の優しい一言を思い出していた。

古河先生 そうかしら？ 違うかなあ。

ユリ子 はい。先生、あったかい。それに、何かこう毎日喜んで生きているって感じがする。

古河先生 そうねえ。今のわたしは、そうなんじゃないかな。だって毎日神様に生かされているんだもの。こんなにうれしいことはないわ。でも以前のわたしは全然別人だったな。

ユリ子 え？

ナレーション 古河先生が別人だったって、どういうことだろう。そんなことを思いながら、水島さんの家に着いた。見ると、父と母も来ていた。先生が電話をしておいてくれたらしい。先生たちにお礼を言い、わたしたち家族4人は家に帰った。4人とも無言だった。でも父が黙って肩に掛けてくれたコートが、とても暖かくわたしの心を包んだ。“何かが変わってきた”そう信じたかった。

和哉 その夜、和哉がわたしの部屋にやってきた。

和哉 姉貴、ごめんな、心配かけて。でも、どうしても我慢できなかったんだ。

ユリ子 分かってるって。もういいよ。

和哉 姉貴とこうやって話すの、ずいぶん久しぶりだな。

ユリ子 そう言えばそうだね。小さいころはお父さんやお母さんも一緒に、いろいろ話したよね。

和哉 うん。本当に最近、この家全体が冷めきっていたっていうか、乾ききってると思ったんだ。

ユリ子 わたしもだよ。

和哉 言葉が減ってきた分、何か、親の無言の重圧っていうか、目に見えない力が、日に日に強くなってきて、この間の模試の結果がイマイチだったこともあって、もうこの家で息するのも苦しくなって、逃げ出したくなっちゃったんだよ。

ユリ子 分かるような気がする。

和哉 “何で家族がいるのに、この家は暖かくないんだろう”って真剣に悩んでたんだ。“その原因は親だ”って決めつけてた。

ユリ子 わたしだってそう思うよ。渡したちのことだって、小さき時はかわいがったぐせに、手がかからなくなれば、もう自分勝手なことやって手、わたしたちのことなんか…。

和哉 でも違うって気づいたんだ。子供たちよ、主にあって両親に従いなさい。これは正しいことだからです。そうしたら、あなたは幸せになり、地上で長生きする。」

ユリ子 何なの、それ？

和哉 聖書の言葉だよ。今のはエペソ人への手紙ってところに書いてあるんだ。今日

会で覚えさせられたんだけど、最初はすごく抵抗あった。だけど、水島さんに言われたんだ。 親に従うのは、神様の目から見ると正しいことだし、そうしたら幸せになると神様は約束なさってる。だから、今自分が幸せでなかったら、君の親への態度にも問題があるんじゃないか」って。なんかギクッとさせられたよ。そして、この言葉のかぎは“主にあって”ということなんだって。その意味をよく考えなきゃって思ってるんだ。

ユリ子                    ふーん、教会ってそんなこと教えるわけ。“主にあって”か…。  
ナレーション        なんか、今の和哉は何倍も大きくまぶしく見える。今までの一哉とは別人のよう  
だ。別人？ そう言えば先生も別人になったと言っていたけど、このようなことな  
のだろうか。わたしは、何か自分の知らない別の世界を、古河さんも、水島さんも、  
そして和哉も知っているということに、うらやましさを覚えた。それは、あのふか  
やくんや久美たちに誘われて知った世界とは違う、とても暖かい世界のような気  
がした。

（効果音）            教室のガヤ）

久美                    おっはよう、ユリ。昨日大変だったみたいね。  
ユリ子                    うん。  
久美                    でもさ、元気出しなよ。和哉君も無事帰ってきたことだし。  
ユリ子                    うん。  
久美                    ところでさあ、今日、新しい彼とディスコ行くんだけど、行かない？  
ユリ子                    わたし、パス。  
久美                    え、ウソ。ユリらしくない。  
ユリ子                    とにかくわたし、パスだからね。

ナレーション        わたしは、昨日の和哉の言葉がずっと気になっていた。  
ユリ子（モノローグ） “主にあって両親に従う”、そして“自分の態度にも問題がある”か…。

古河先生              どうしたの、浜田さん？  
ユリ子                    あ、先生。昨日はどうもすみませんでした。  
古河先生              いいのよ、別に。あれから大丈夫だった、和哉君？  
ユリ子                    はい。あのあと、久しぶりに和哉としゃべったんです。そしたら、なんかいろいろ  
と教えられちゃって。

古河先生              ふーん。どんなことを話したの？  
ユリ子                    恥ずかしいんですけど、わたし、親に見放されてると思ってて、好き勝手なことし  
てたんです。父も母も弟も、ただ同じ屋根の下にいるってだけで、みんなお  
互いに無関心で、次分のことしか考えてない。乾ききったドライな関係。こんな  
の家族じゃない、親子じゃないって、精一杯突っ張ってみたけど、心の中は無性  
に寂しかった。そしてその原因は、絶対親だ、親がすべて悪いんだって決めつけ  
ていたんです。和哉も同じこと考えてて、たまらなくなっただけ家出したらいいんです



けど、その弟が、古河先生たちと話してて、少しずつ考え方が変わったって言うんです。“悪いのは親だけじゃない。自分たちにも原因があるんだ”って。えっと、“主にあって両親に従いなさい”だったかな。その言葉を教えてくれたんです。

古河先生

「丘ペソ人への手紙」ね。それで、浜田さんはどう思ったの？

ユリ子

“主にあって”っていう言葉はよく分からないんだけど、両親に従うってことをしてなかったんじゃないか。自分の立場でしか親を見ていなかったんじゃないかって…。

古河先生

そうかぁ。自分の自己中心的な心に気づいたってわけね。結局、親子って、ううん、人間って、そこから出発しない限り、分かり合えないみたいね。わたしもそうだったな。

ユリ子

先生も？

古河先生

うん。わたしの場合はね、浜田さん床のお母さんとちょうど逆だったのかな。わたしの母はものすごく気がつくタイプで、あれしなさい。これしなきゃダメよ」ってものすごくうるさかったの。もうベタベタ、熱で溶けたアメみたいな関係だった。周りからは、おたくの親子は一卵性双生児ね」なんて言われて。でもその母は、わたしが高校 3 年の時に、がんで死んだわ。あとで母の日記を読んだら、母の家系は祖父の代から 3 代続けてがんで死んでるのね。だから母も、ひょっとしてそう長くは生きられない、わたしの成人する姿を見られないかもしれないと思ってたわけ。それで、元気な間に、わたしに母親としてできることをすべてやってあげたいと、母なりに思ったらしいの。今でもあの日記の最後のページ、はっきり覚えてる。早苗、ごめんね。なんてうるさい母親だと思ったでしょ。でもわたしには、こんなかたちでしか、あなたに残してあげるものがないの。このうるさいお小言を、母の形見と思ってね。」って。あの晩、一晩中わたし、ワァワァ泣き明かしたわ。

ユリ子

先生…。

古河先生

うん、今はね、あの母のお小言が無性に懐かしい。あのころはあんなにイヤだったのにね。

ユリ子

わたしの場合は、父も母も何も構ってくれないのが、すごく不満だったんです。寂しかったんですね。でも今、先生話を聞きながら、ふと思ったんです。母も本当はいろいろと、それこそガミガミわたしに言いたいんじゃないかって。母の性格から言ったら絶対そうです。和哉への母の態度見てると分かるんです。でも、それをじっとこらえて、静かに見つめてくれているのだとしたら、母としては、大変な努力だったんじゃないかって。

古河先生

浜田さん。あなた、そう考えられるようになったら、大人よ。

ユリ子

今まで、何も構ってくれない」って一人でスネて、荒れてたけど、もしほかの女の子たちの親みたいにベタベタされてたら、わたし今ごろ、ほんとに家出していた

かもしれない。

古河先生 うんそうね。‘愛’って、人それぞれ、いろんなかたちがあるのかもね。大事なのは、その愛の基盤をどこに置 ぐかっていうことじゃないのかな。

ナレーション わたしは、その時、どこかでその言葉を聞いたような気がした。

ユリ子 … ‘愛のかたち’、‘愛の基盤’…、あ、そう言えば先生、この間、教会の看板を見たんです。「ここに愛がある」って。あの時は、心を許してた男友達に体を求められて、夢中で逃げ出した時で、もう心の中ズタズタでした。 愛なんてどこにあるのよ！」って叫んでたんです。でも今、なんか、本当の愛というものがあったら、その愛を知りたいって気持ちで一杯です。先生、「ここに愛がある」ってどういうことですか？

古河先生 うん、それはね、‘神の愛’、イエス様が十字架の上から、わたしたちに ぐださった大きな大きな愛のことなの。

ユリ子 先生はその愛を持ってるんでしょ？ 水島さんも。イエス様はわたしでも愛して くれるのかな。

古河先生 もちろんよ。それを自分で確かめに、今度和哉君と一緒に教会にいらっしやい。ご両親も誘ってみたら？

ユリ子 来るかどうか分からないけど、そうしてみます。

ナレーション わたしは、その時、心の中で ‘ここに愛がある’とつぶやいていた。これが信じられたら、自分を取り巻くドライな関係に、いや、自分自身のドライな心に、今度こそ別れを告げられるかもしれないと思いながら――。

<完>